

伝列者集採の(声)  
時代たちの手聞き

小井川 潤次郎

## 「話」という方法

— 小井川潤次郎と仲間たち —

小池 淳一

昭和四年一月七日、青森県八戸市で月に二〇回出されていた新聞『奥南新報』紙に「村の話」というコラムの連載が始まった。これが今日に至るまで類似の企画がない新聞紙上における民俗採訪記録の連続記事の出発であった。

本稿はこの連載を企画運営した小井川潤次郎とその仲間たちが達成した研究とその方法に関するささやかなノートである。

### 一 小井川潤次郎と八戸郷土研究会

小井川潤次郎は明治二一（一八八八）年、八戸に生まれた。没したのは昭和四九年である。八戸をはじめとする三戸郡、さらには青森県南部地方の郷土研究、地域史研究に関する多方面の論客として知られた。その活動の舞台も多岐にわたるが、最も主体的に関わり、また発表した文章も多いのが戦前における『奥南新報』の「村の話」であり、戦後は潤次郎の長男である静夫が鉄筆をふるった孔版（謄写版あるいはガリ版とも）による八戸郷土叢書や

八戸郷土研究会の機関誌『いたどり』、同会の月報であった。

八戸郷土研究会は文芸の研究を目的としていた詩文会を大正九（一九二〇）年に郷土研究会と改称したことに淵源を持ち、昭和三年に設立されたものであった<sup>1)</sup>。小井川はこの郷土研究会の中の人物の一人であり、またその活動、運営に腐心していた。その背景には、小井川自身が小学校の教員を長く務め、郷土教育の前提として郷土研究の必要性を感じていたことがあるだろう。当然、その郷土研究は今日の民俗学の領域に限定されるものではなく、考古学や歴史学、方言学、植物学、動物学、美術史などの領域にも広がっていた。

『奥南新報』紙上だけでも、小井川は短歌や俳句の投稿欄の選者、恋川なぎさとしての活躍があり、当時の八戸の文化の担い手として幅広く活動していた。後世からの民俗研究という狭い視点では全貌をとらえることが難しい存在ということもできるだろう。ただし、結果的に小井川自身が最も長く継続して意を注いだのは、民俗研究とやがて称されるようになっていく領域であったこと

は首肯されるべきであろう。小井川の著作は、一九九七年から現在に至るまでに、『小井川潤次郎著作集』として十一巻まで刊行されているが、それ以外にも多数あることが知られており、全貌をとらえるのは容易なことではない。本稿では小井川個人ばかりではなく、小井川とその周辺の人びとの知的な営為の成果と特徴とを確認していくこととしたい。

口承文芸研究においては、「村の話」の主要な話題の一つであった昔話の報告が柳田國男によって注目され、『昔話研究』誌上に「八戸地方の昔話」(一九三六)<sup>3)</sup>として取り上げられたことが重要である。柳田の「八戸地方の昔話」は昔話の語型研究における先駆的な業績であり、やがて『日本昔話名彙』へと発展していくものであった。そしてそうした昔話資料としての「村の話」への注目は関敬吾の『日本昔話集成』や『日本昔話大成』にも受け継がれている<sup>4)</sup>。しかし「村の話」を実際に通覧すれば明瞭なように、ここに寄せられたのは昔話に限らない幅広い民俗事象の記録であった。

また八戸とその周辺という比較的狭い地域で多年にわたって活動したことから、あるいはいささか閉鎖的な、地域社会のなかで自足するようなタイプの研究者であったかのように小井川のことを断ずる向きもあるかもしれない。しかし、そのような見方は誤りであるか、極めて表面的なものであると言えよう。彼は孤高、反骨の人であると同時に開かれた人、手をさしのべ、つなぐ人でもあった。その表れとして『奥南新報』の「村の話」をはじめ

めとする民俗関係記事の執筆者の多彩<sup>5)</sup>さや、八戸郷土研究会から多くの優れた研究報告を生み出す研究者が育っていったことを指摘しておきたい。特にここでは後者の八戸郷土研究会とその活動のなかで育成された研究者たちの活躍とそこから汲み取ることのできる方法について述べておきたい。

## 二 「郷土研究」の継承と展開

『奥南新報』紙に連載された「村の話」は、一九九八年に青森県史の編さん事業の一環として青森県史叢書にまとめることができた<sup>6)</sup>。これからの小井川潤次郎と「村の話」研究はこの作業を出発点にしていた<sup>6)</sup>ことを強く願うものであるが、「村の話」集成の試みは青森県史が最初ではなかった。形となったものとしては昭和二二年に小井川静夫が孔版で編集発行した『村の話』の第一巻(小井川靖夫・佐々木喜善・能田太郎集)、第二巻(和泉幸一郎集)、第三巻(神代忠治集<sup>かこみ</sup>)、第四巻(細川重計集)があり、さらに昭和三〇年には第五巻(夏堀謹二郎集)が刊行されている。佐々木喜善と能田太郎に関する説明は不要であろう。小井川靖夫は潤次郎の次男で静夫の弟。和泉、神代、細川、夏堀はいずれも八戸郷土研究会に集った若者たちである。この人びとが「村の話」を舞台に小井川潤次郎の郷土研究を支え、発展させたということもできるだろう。小井川は民俗研究の組織化はおろか、その存在意義もおぼろげであった昭和の初めに、郷土にこだわり、郷

士で考える人材を育成することに成功していたのである。

そのなかで夏堀謹二郎の軌跡についてふれておこう。夏堀は明治四二(一九〇九)年、八戸生まれ。没したのは平成一五年である。昭和三年に岩手県立工業学校を卒業、この頃から小井川の許へ通うようになり、その薫陶を受けた。それからほどなくして「村の話」の掲載がはじまり、夏堀はそこに民俗探訪の記事を頻繁に寄稿するようになる。<sup>(7)</sup>夏堀は昭和四年だけでも一八回の記事を寄せている。「村の話」の初年度であるこの年に掲載された記事は全部で六四回であるから、約三分の一近くを占めたことになる。まさに八戸郷土研究会の優等生であった。

夏堀の軌跡で興味深いのは、出身地八戸をやがて就職のために離れた後も、赴任先の青森の新城や下北の大湊でも探訪活動をおこない、その成果報告を「村の話」に寄せ続けたことである。生活のなかで、民俗研究を持続し、それを共有のものとしていく姿勢は、小井川潤次郎とその仲間たちの視野を八戸に限定せずに北奥羽に広げるものであっただろう。

またその研究の内容においても、夏堀は優れた業績を挙げている。その一つは生家のすぐ近くに住んでいたイタコ、根城すゑを小井川に紹介し、自身も巫女たちから巫儀に用いる祭文を聞き取り、『奥南新報』紙上に連載、「まぐ文章」(一九三七)<sup>(8)</sup>としてまとめていることである。これは南部地方に広くみられるオシラサマ祭祀との関わりから注目するに至ったものであろうが、当時にあつては極めて斬新な調査成果であった。もう一つは、子どもた

ちの伝承に早くから着目し、わらべ唄や童戯の採集も行っていることも興味深い。柳田國男が『小さきものの声』(一九三三)や『子ども風土記』(一九四二)などにおいて子どもが担う民俗文化の重要性を主張するのと相呼応するかのような視点であり、達成であったといえよう。<sup>(9)</sup>夏堀は戦後に仙台へと居を移し、東北民俗の会の創設期からのメンバーとして息の長い調査研究活動と社会教育活動とに励むこととなる。

こうした夏堀の業績は、八戸郷土研究会と小井川潤次郎の活動から生まれたものであつて、先にも述べたようにオシラサマの研究からイタコへの注視が生まれ、また初等教育における郷土教育への視点から子どもの民俗の発見が導かれていったということもできよう。そうした意味では夏堀の研究も、夏堀個人の資質もさることながら、八戸郷土研究会の知的な雰囲気から醸成されたものであつたともいえるだろう。そうした意味では、八戸の郷土研究で問題にすべきなのは小井川潤次郎や夏堀謹二郎といった個性であるとともにそうした研究成果を生みだし、流通させていった新聞といったメディアや孔版、製本といった技術に注目する必要がある。

### 三 「話」をとらえる技術―新聞とガリ版と

夏堀謹二郎は「まぐ文章」の冒頭において、彼らの郷土研究についての八戸の人びとの反応を記している。「八戸郷土研究会

つて昔話ばかりきいではいゝもな」<sup>(10)</sup>「おしら様ばかりやつてゐて」。…。いずれも当時から現在に至る民俗学にとつての重要な課題ではあるものの、当の八戸の人びとにとつては日常的であまりにもありふれているために、その意義や価値は十分に認識されてはいなかったたのである。新聞という媒体に昔話やオシラサマ、あるいは巫女の祭文などは不急の話題であり、埋め草に類するものと見られていた側面もあつただろう。

小井川潤次郎は「村の話」について「そのままの話を歓迎す」と強調し、自らが「目を通して欲しい」とだけ留保をつけている。<sup>(11)</sup>「村の話」という記事が、小井川の発案により、また彼自身の監修とでもいう傾向を持っていたことは明らかである。昭和一六年に戦時体制による新聞統合で『奥南新報』自体が姿を消すまでの間、「村の話」は変幻自在に長短さまざまな話題を提供し続けたが、それは小井川が筆をさしはさむにしても「村の話」は昔話と限つてゐない。なんでもいゝ。今昔の話、見たり聞いたりのお話でいゝ。<sup>(12)</sup>とといったかなり大らかな姿勢に終始したことが大きい。こうした態度が多様な事例の集積に大きく寄与したと言えるだろう。後に「：勝手にこの新聞をと、私らは使つたことになる」と回想しているのもよく理解できよう。<sup>(13)</sup>

八戸とその近郊という限られた社会ではあつたものの、不特定多数の読者に対してゆるやかに、そして持続的に開かれていたメディアとしての『奥南新報』に依拠した小井川潤次郎とその仲間たちの営みは、こうした柔軟な姿勢で多くの「話」の捕捉に成功

したのである。これは民俗研究―当時の彼らの認識は郷土研究であつただろう―を取り巻いていた状況とそれへの対応あるいは姿勢として評価して位置づけていくべきものである。

こうした小井川とその仲間たちの調査研究は、戦後になると小井川静夫の孔版印刷の技術に大きく依存することとなつていく。小井川静夫は潤次郎の長男で、父と同じく教職に従事し、長者山下の山伏小路にある小井川家の長男という意味の山下甚六という筆名を用いることもあつた。最初にも述べたように、戦後の小井川潤次郎、さらに八戸郷土研究会の活動は、そのほとんどが静夫が鉄筆で刻み、刷り、製本したかたちで世に送り出されている。それらの発行部数は多くても一〇〇部前後であり、版画や写真の貼り込みなどを交えた民芸調のしやれた謄写印刷物である。

小井川静夫がこうした技術をいつ頃、どのようにして身につけたかは十分に明らかにはなっていないが今日、静夫が残した多くの記録類や作品をみると、教育活動にも民俗研究にもその技術が縦横に駆使されていくことがわかる。一般に孔版は速報性に富み、また同内容を一定の部数、確実に周知するには優れたメディアであつた。さらに静夫はそれに美術工芸的な要素を付加していた。ここまでは孔版全盛時代の教育活動においては普遍的なことであつたかもしれないが、民俗研究にも応用した点がユニークであつたといえるだろう。

八戸郷土研究会におけるガリ版の効用は、軽便性と経済性の二つを指摘できるように思われる。強制力のない、自由な集まりの

開催とその記録及び周知には、活版印刷では柔軟性の面で物足りなかつたであろうし、資金面でも難しかつたと思われる。静夫が編集し、原紙を切り、時にはその場で空いたスペースに適した記事を書く。さらには家族を動員しての印刷、製本を考えれば費用は限りなく節約できたのであろう。静夫は戦後に財団法人民俗学研究所の地方研究員にもなり、科研費による調査研究を実施している。ここでもその報告書はガリ版で作成され、文部省と民俗学研究所との両方に提出されたらしい。<sup>(15)</sup> 静夫、そして八戸の郷土研究の同志たちにとって孔版は決して内輪向けだけのものではなく、公的な書類を生み出す技術でもあつた。

小井川潤次郎とその仲間たちの営為は、北奥羽の地から戦前は地方新聞、戦後はガリ版といったメディアによって発信され、共有のものとされていったのである。最後にそうした営為の内容を「話」という語に注目してさらに探り、定位しておきたい。

#### 四 「話」から「話」へ——小井川たちの方法——

近代日本の学問一般に比して、大正期にわたちを整えていく後発の学問としての民俗学は後進の育成や成果の周知のシステムにおいても大学などの教育研究機関を持たず、趣味的なものとして遇される可能性を持っていた。それは必ずしも負の側面ばかりではなかつたと思われるが、そうした草創期の民俗学の特色を示すものとして、内容は論考であつても「話」という論文風ではな

いタイトルを名乗つて論述するという姿勢があつた。<sup>(16)</sup> そうした風と「村の話」や戦後に小井川が好んで用いた「話」と題した論著の数々——『婁子の話』（一九四七）、『しまりの話』（一九四九）、あるいは著作集第一巻「伝説雑纂」（一九九八）に収められた諸論考など——とは相通するものがあるように思われる。

小井川の筆致は柳田をはじめとする初期の民俗研究によく見られた随筆風のものであり、連想に導かれるまま、自在に筆が進むといった趣がある。主題を見失わないようにするのに苦労する面もあるが、読み進めるうちに郷土に対するさまざまな見方や知識が授けられていくという利点もあろう。一例を「村の話」の中から挙げてみよう。昭和六年七月四日に「村の話」で「母衣子の猫」と題して報告されているものである。

是川の東母衣子の地頭の分家で、いつも来る玉子買ひに何か御馳走しにお膳を出した。主人が便所に立つた拍子に七つか八つになるその家の二毛猫がちよいと出て来て主人の汁椀に尻つぼを突込んで去つた。それを見た玉子買ひが縁喜が悪いからといつてその汁を捨てさせた。

そのあとで行つた時大きな南瓜があるから煮て御馳走しようと手をかけた。ところでその南瓜がまたばかに大きいので玉子買ひが何処に成つたのかと尋ねたら、主人はさうさういつか猫が尻つぼをつ、こんだ汁を捨てた所だつたたと答へた。玉子買ひは妙な顔をしてゐたが、これは食べない方がよから

うと言つてゐると、そこへ猫が躍り出て玉子買ひにと襲ひかゝつた。家の人たちはびつくりしてやうやう猫を捕へた。そこで玉子買ひはい、位行くまで押へてゐて呉れるといつて天秤棒を持つて釣橋まで来た時ふうふうと後の方から唸り声がかきこえるのでふり返ると、この猫が恐ろしい形相で追かけて来た。主人のところでもうよからうと手を放したのが間違ひだつたのだ。玉子買ひは仕方がないで天秤棒で戦ひ遂に擲り殺し橋場に投げ下ろした。

そのあとしばらく行かずにゐたが、大分時すぎて行つた。もどりに例の橋までかゝるとその猫が牙をむき出して睨んでゐた。まだ腐らないでゐると石などを打付けてかへつた。そのあとで行つた時も死骸がそっくりしてゐるので怖ろしくもなり小癩にも障つたので天秤棒でたゝきつけようとしたが場所がい、工合に行かぬので足でぼつぱり踏みつけるとその途端にがつぶりと咬みつかれた。それを放さうとしたが放れらばこそ、たうとう主人の家まで行つて放して貰つた。

この猫のわけをきくと家の人がこの猫の親をいぢめ殺したものだつた。この猫がその仇を報へようとしたのを玉子買ひに見やぶられたのがいやさに玉子買ひにかゝつたものらしいといふ事だつた。玉子買ひは岩の沢（烏沢）の人なさうで腿にその疵が残つてゐるさうである。

明治の末といふことだが釣橋は大正にはひつてから架けたやうだからはつきりしない。

これは、いうまでもなく「猫と南瓜」の伝説化もしくは世間話化したものであるが、「村の話」では次の回に中道等が「猫の執念」として類似の話が牡鹿半島でも聞くことができ、また随筆などにも記録されていることを述べている<sup>(17)</sup>。即座に関連する情報<sup>(17)</sup>が寄せられていることから、掲載、編集にあつたての操作が行われた可能性もある記事である。続けて読むことで八戸の世間話が遠く離れた地にも類似のものがあることに注意を喚起する仕掛けが施されているのである。

この話はさらに、戦後にまとめられた『褰子の話』<sup>(18)</sup>では、褰子にかかつている釣橋をめぐる話として記載されている。同じ内容のものでも文脈が異なるところで用いられることによつて違う意味を帯びるようになってゐるのである。

口承の資料、すなわち〈声〉をとらえ、対象として意識しているために、「話」という視点で日常から切り取るというのが小井川たちの郷土研究の特徴であつた。小井川たちにとつて「話」は資料をすくい上げる単位であり標識であつたと同時に、それらを吟味し、意味や類例を考へる際の叙述の核でもあつた。そして「話」をとらえ、資料として分析、定位して終わるのではなく、再び「話」としてさしだす、というのが小井川らの流儀であつたとも言えよう。そこには旧来の口承文芸研究を超える「口承」への着目の先駆を見出すことも可能であらう。

小井川たちが、八戸でそれほど意識しないままに実践していた

この方法は、結果として長い期間用いられた続けた優れたものであったといえることができる。それは姿勢であるとともに態度であり、敢えて方法と言挙げしてしかるべき成果を積み重ねたと言えるだろう。小井川たちは「話」をとりあえず「話」そのままですくい上げ、さらに「話」の流れのなかに再度、解き放つという営為を続けた。それは生活から研究へ、というフィールドサイエンスが抱え込んでいる大きな命題であるとともに、郷土において郷土を主題としつつ、郷土を考え続ける無限運動の様式でもあっただろう。

「村の話」という地方新聞の連載記事に徐々に込められていった「話」への接近と採録、探究の方法は、方法のみを切り取って提示しようとする現代の研究の様相とはあまりにも異なっており、違和感を覚える向きもあるかもしれない。しかし、「村の話」にはじまる資料採録の営みが、日本の口承文芸研究、あるいは民俗研究にとってまだ十分に受け止められていない質の高い膨大なデータの集積を生んだことに疑いを挟むことはできないだろう。

本稿を〈声〉の採録と提示のさきがけとなった小井川潤次郎とその同志たちの営みの再評価を目指しての模索の一端として位置づけた。

#### 〔注記〕

- (1) この経緯については従来、混乱もしくは曖昧なままであったが、小熊健によつて確実な史資料に基づく見解が提示された。小熊健『奥南新報』にみる民俗記事―八戸郷土研究会を中心にして―（青森県環境生活部県史編さん室編『奥南新報「村の話」集成（下）』、一九九八、青森県、二三〇―二三六頁）、二三二―二三三頁、参照。
- (2) 第一巻は伊吉書院、第二巻以降は木村書店から刊行。
- (3) 『柳田國男全集（第二九巻）』（二〇〇二、筑摩書房）、四〇五―四七二頁、所収。
- (4) この点については、野村純一「柳田國男と『村の話』―昔話研究への出立―」（『昔話―研究と資料―』二四号、一九九六、日本昔話学会、八八―一〇一頁）、同「柳田國男の昔話研究―スクラップ・ブック『村の話』を巡って―」（『遠野物語研究』創刊号、遠野物語研究所、一九九六、一一―一三頁）や佐々木達司「昔話研究における『村の話』の役割」（青森県環境生活部県史編さん室編『奥南新報「村の話」集成（下）』、一九九八、青森県、二三七―二四三頁）等を参照。
- (5) 柳田國男はもちろん、佐々木喜善、喜田貞吉、能田太郎、中道等といった人びとの名を『奥南新報』紙上に見いだすことができる。前掲注（1）の小熊論文、二三四―二三五頁を参照。

- (6) 青森県史叢書『奥南新報「村の話」集成(上下)』(一九九八、青森県)。上巻には昭和四年から八年、下巻には昭和九年から一六年に至る「村の話」と題された記事を収録し、関連する論考、解説を収めている。本稿はこの際の調査・編集作業における知見に多くを拠っている。なお、その作業に従事した青森県史民俗部会のメンバー(小熊健、佐々木達司、古川実、小山隆秀、工藤廉)とのさまざまな場面における対話と御示唆とに負うところが極めて大きいことを明記する。
- (7) 夏堀の生涯とその事績については『青森県史 民俗編資料 南部』(二〇〇二、青森県)の特に第二部及び『青森県の民俗』四号(二〇〇四、青森県民俗の会)の【追悼夏堀謹二朗先生】を参照。本稿でも以下、これらの記述に負う部分が多い。
- (8) これは前掲注(7)の『青森県史 民俗編資料 南部』に収録した。六一六一―六三二頁。小井川潤次郎はこの刺激を受け止め、発展させて『いたこの伝承』(一九五三、八戸郷土研究会)を執筆する。
- (9) 筆者は夏堀自身から直接、子ども遊びといっても、唄を伴うものと伴わないものがあり、後者をどのように位置づけるかはまだ十分に議論されていない問題であること、後者の代表的なものとして綾取りがあることを教示された。綾取りについては夏堀謹二朗『日本の綾取』(一九八二、有紀書房)参照。
- (10) 前掲注(7)『青森県史 民俗編資料 南部』、六一六頁。
- (11) 夏堀謹二朗「村の話」のことと「八戸郷土研究会」(『奥南新報「村の話」集成(下)』、二三―三二九頁)、二三三頁。
- (12) 小井川潤次郎「犬と年縄」(『奥南新報』昭和一〇年一月一三日。『奥南新報「村の話」集成(下)』、六頁)。
- (13) 前掲注(1)の小熊論文、一三二頁の指摘。
- (14) 拙稿「夏堀先生から受け継ぐもの」(『青森県の民俗』第四号、二〇〇四、青森県民俗の会、一四六―一四八頁)、一四六頁参照。
- (15) 拙稿「権現様研究の周辺から―民俗研究の思想史へむけて―」(『柳田國男全集第一巻月報二二』、一九九九、筑摩書房、六一―八頁)、参照。
- (16) 池田弥三郎によれば、そうした題名の付け方の創始者は折口信夫であった。折口自身が晩年よくそう語っていたという。池田弥三郎「信太妻の話」の成立」(『現代詩手帖』第一六巻第六号、一九七三、思潮社、八一―二五頁)、一五頁。
- (17) 小井川潤次郎「母衣子の猫」、中道等「猫の執念」(『奥南新報「村の話」集成(上)』、一九九八、青森県)、一一二―一一三頁。
- (18) 小井川潤次郎『褰子の話』(一九四七、八戸郷土研究会)、四〇―四二頁。  
(こいけ・じゅんいち／国立歴史民俗博物館)